

4. 長者森古墳

1. 古墳の概要

福知山市夜久野町大油子、国道9号線沿いの丘陵部中腹に位置する（旧福知山市立育英小学校校庭）。明治37年（1904）、学校建設に伴う整地中に2基の古墳が確認され、1号墳は工事に伴い完全に削平され、2号墳のみ墳丘と出土遺物が保存され、現在は長者森古墳と呼ばれている（夜久野町教育委員会1981）。2号墳は2002年3月に「長者森古墳」の名称で京都府の史跡に指定された。

2. 遺構

墳丘は直径25mの円墳で、東南東に開口する両袖式の横穴式石室を主体とする。石室はほぼ完存し、全長12.2mで、玄室長5.5m、玄室幅2.3m、玄室高2.6m、羨道長6.7m、玄門幅1.1mを測る。短辺20～30cmの小ぶりな玄武岩を用いて構築しており、丹波でも最大規模の石室である。平面形態は畿内の両袖式横穴式石室の影響を受けた可能性が高いが、玄門部に明確な楣石を用いる点など、畿内以外の要素も併せ持つ（富山2007、菱田2013）。2020年8月に（株）相互技研によりSfM-MVS（Structure from Motion-Multi View Stereo）を用いた三次元測量調査が実施され、3Dモデル及び石室のオルソ画像展開図が作成された（図2）。（守田）

3. 出土土器

(1) 概要

『天田郡中夜久野村沿革史』（1956）には長者森古墳出土「祝部式土器」の図が11点分掲載されている。いずれの個体も口縁部側を天として描かれているものの、形状からみて杯蓋4点、杯身7点である。現在、「館塚出土祝部式土器」と記されたラベルが貼られている長者森古墳出土須恵器は杯蓋4点、杯身7点を数え、器種別数量の合計が合致することから資料の来歴として信頼できる。（図3、写真3・4）

1～4は蓋杯でいずれも底部に回転ヘラケズリを施している。1は口径13.8cmを測り、口縁部には段を設け端部を鋭く仕上

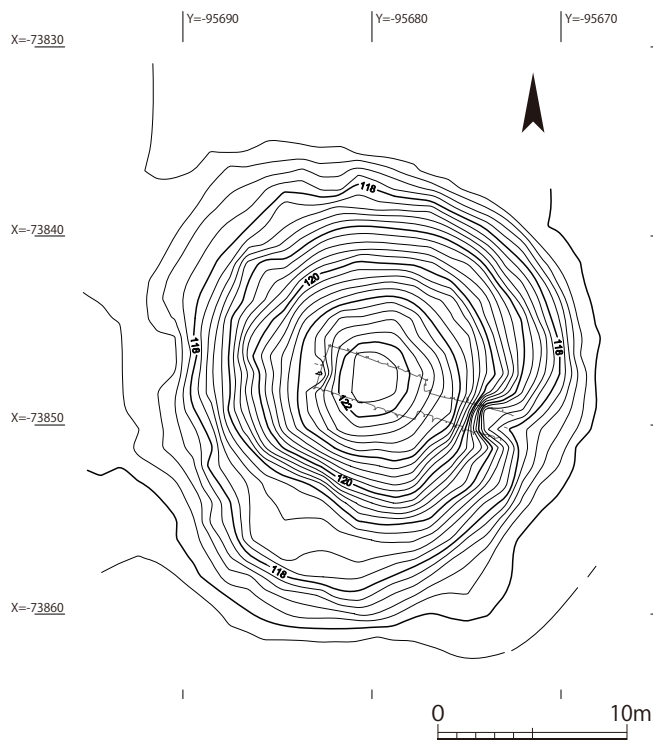


図1 長者森古墳墳丘測量図 (S=1/400)



写真1 長者森古墳墳丘 3Dモデル

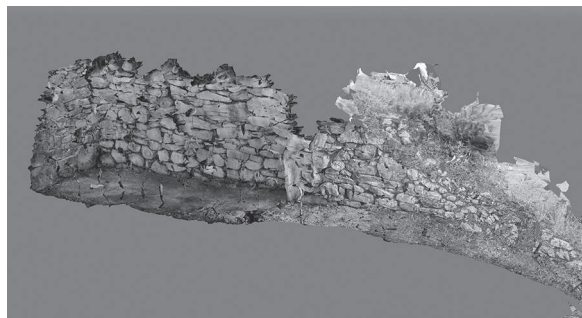


写真2 長者森古墳石室 3Dモデル

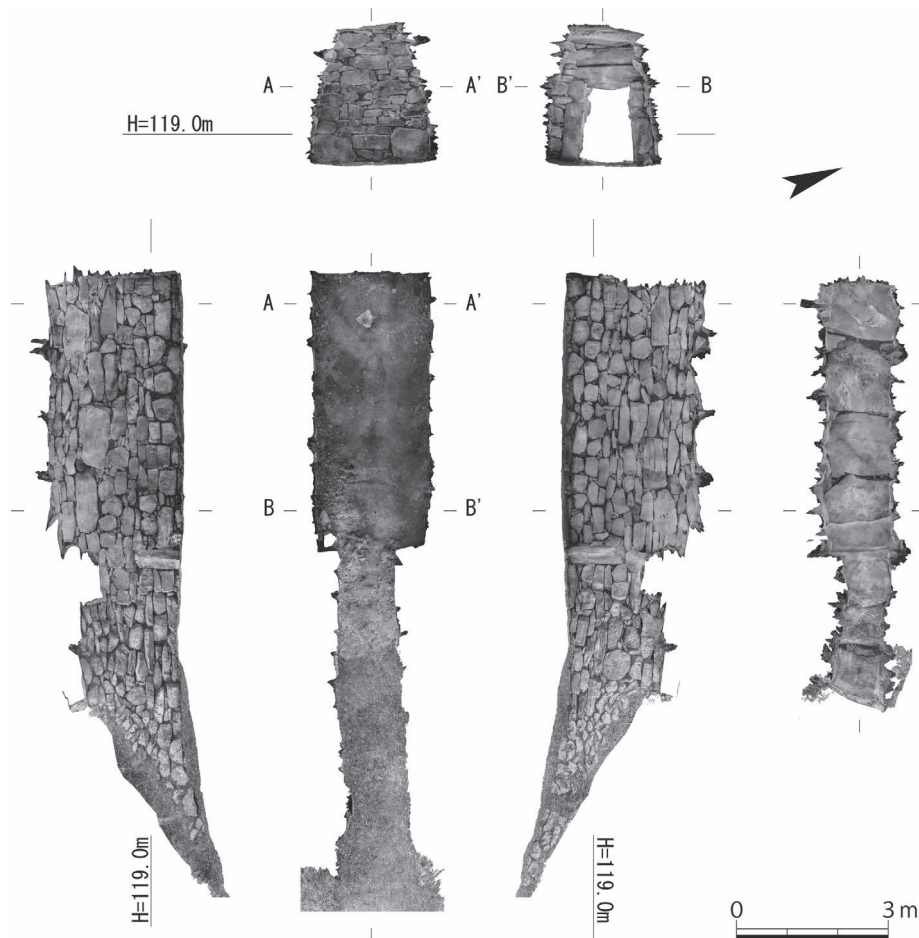


図2 長者森古墳石室オルソ展開図 (S=1/150)

げている。体部と口縁部の境には緩やかな稜をもつ。2は口径14.9cmを測り、体部と口縁部の境は緩やかである。底部内面に同心円状の圧痕が残る。3は口径14.4cmを測り、口縁端部に段をもつ。体部と口縁部の境は明瞭でなく位置は低い。4は口径14.4cmを測り、頂部が盛り上がる山形を呈する。5～11は口縁のたちあがりがある杯身である。5～7は直立気味のしっかりとしたたちあがりをもち、底部には回転ヘラケズリが施されている。5は口径13.0cmを測り、口縁端部がやや外反する。6は口径12.9cmを測り、底部は回転ヘラケズリが施されている。7は口径12.7cmを測り、器壁がとくに薄いのが特徴である。8は口径11.9cmを測る比較的是っきりとした口縁のたちあがりをもつ個体で、底部には回転ヘラケズリが施されている。9は口径12.2cmを測り、底部は回転ヘラケ

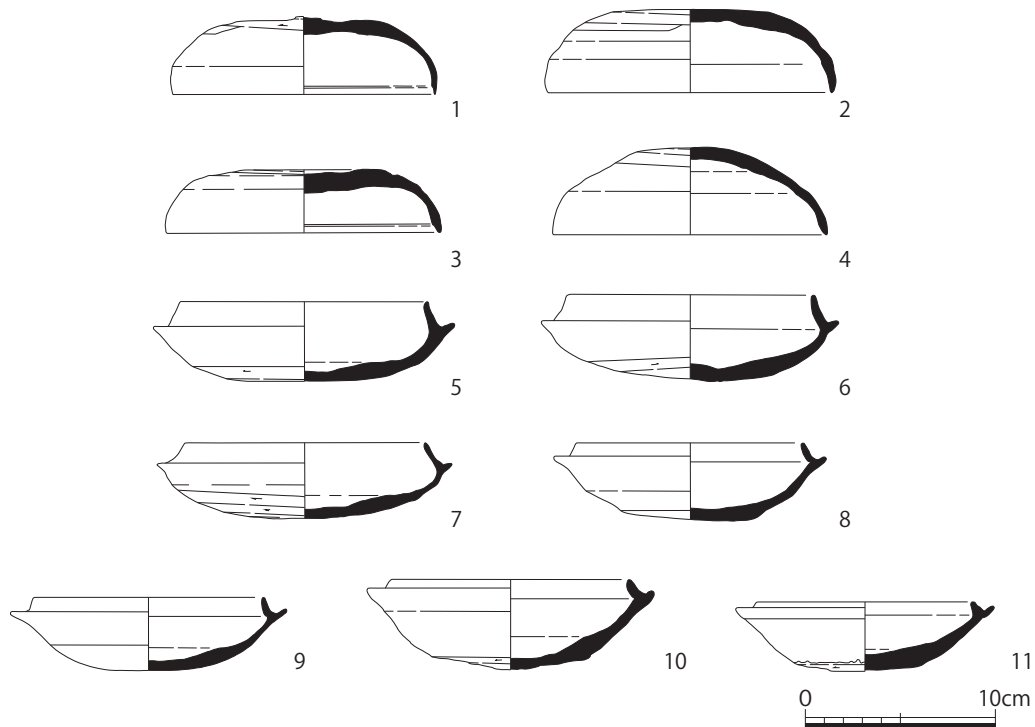


図3 長者森古墳出土土器 (S=1/4)

表1 長者森古墳出土土器観察表

番号	器質	器種	法量 (cm)			残存率	重量 (g)	色調		胎土	焼成	技法上の特徴	備考
			口径	底径	器高			外面	内面				
1	須恵器	杯蓋	13.8	—	4.1	90%	(183)	灰色	灰色	密 (φ1~2mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	
2	須恵器	杯蓋	14.9	—	4.4	50%	(148)	灰色	灰色	密 (φ1mm程度の白色砂粒を少量含む)	硬質	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	天井部内面に同心円状当て具の圧痕
3	須恵器	杯蓋	14.4	—	3.3	95%	(269)	青灰色	青灰色	密 (φ2mm以下の黒色粒を少量含む)	硬質	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	底部内面に静止ナデ
4	須恵器	杯蓋	14.4	—	4.6	完形	253	灰色	灰白色	密 (φ1~3mmの白色砂粒を少量含む)	硬質	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	底部内面に静止ナデ
5	須恵器	杯身	13.0	—	4.2	95%	(291)	灰色	灰色	密 (φ2~3mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	底部内面に静止ナデ
6	須恵器	杯身	12.9	—	4.6	完形	313	灰色	灰色	密 (φ2~4mmの白色砂粒を多量含む)	硬質	底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ反時計回り	底部内面に静止ナデ
7	須恵器	杯身	12.7	—	4.0	90%	(228)	青灰色	青灰色	密 (φ2~3mm以下の白色砂粒を少量、φ5mmの白色砂粒をわずかに含む)	硬質	底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ、ロクロ時計回り	底部内面にユビオサエ後、静止ナデ
8	須恵器	杯身	11.9	—	4.1	完形	186	灰黄	灰黄	密 (φ3mm以下の白色砂粒を少量、φ2mm以下の黒色粒をわずかに含む)	良好	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ
9	須恵器	杯身	12.2	—	3.9	完形	194	灰黄	灰黄	密 (φ3mm以下の白色砂粒を少量、φ2mm以下の黒色粒をわずかに含む)	良好	底部ヘラキリ後不定方向ヘラケズリか	底部内面に静止ナデ
10	須恵器	杯身	12.4	—	4.8	完形	189	灰色	灰色	密 (φ1~4mm以下の白色砂粒を多量含む)	硬質	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ
11	須恵器	杯身	11.4	—	3.7	95%	(300)	灰白色	灰白色	密 (φ1mm以下の白色砂粒を少量、φ3mm以下の黒色粒をわずかに含む)	軟質	底部ヘラキリ不調整	底部内面に静止ナデ

ズリでなくナデ調整により平滑にされ、全体的に緩やかな丸みを帯びている。10は口径12.4cmを測り、口縁部が肥厚し、底部ヘラキリ不調整である。11は口径11.4cmの口縁部のたちあがりの矮小化が著しい個体で、底部はヘラキリ不調整である。

(2) 時期

夜久野地域における古墳時代須恵器の編年観は明確に提示されていないが、近畿地方ではおおよそ大阪府陶邑窯跡群出土資料に基づく陶邑編年により古墳時代における須恵器の年代決定がなされている。本報告においては田辺編年(田辺1981)に準じ出土須恵器の年代的な位置づけについて述べる。

長者森古墳出土須恵器はいずれも蓋杯で年代的な位置づけの推測が比較的容易である。まず、1~3・5~7が古相を、9~11が新相を示し、4・8が両者の中間的様相を示す。古相を示す杯蓋1~3、

杯身5～7はTK10型式新段階（MT85型式）に位置づけられる。杯蓋は体部と天井部の境に丸みをもった稜をめぐらすのみだが口縁端部に段をもつものがある。杯身はやや内斜する口縁の立ち上がりが特徴的である。5・6の口縁部は7に比べて直立し、やや古い特徴を備えている。新相を示す9～11は口縁端部が厚ぼったく、底部に回転ヘラキリケズリを施していない。飛鳥地域における底部ヘラキリ未調整の蓋杯の顕在化は7世紀前半代に相当する飛鳥I期の後半における変化であるため（深澤2002）、これらはTK209型式以降、7世紀前半以降の資料とみなせる。以上の資料の中間的な様相を有する杯蓋4、杯身8はTK43型式に位置づけられる。（溝口泰久）

4. 出土金属製品

(1) 鉄刀（図4、写真5）

『天田郡中夜久野村沿革史』（1956）には本墳からの「発掘物」として「刀剣直刀一本錆生じ腐蝕しつつあり」とあり、井上守による「明治37年中夜久野小学校々庭内長者古墳出土品 昭和三十二年七月二十五日調」には本墳出土品として「刀剣 一口乃至二口（腐食破損甚しく原形を止めず 復元不可）」とある（井上1957：33）。図面や写真などが一切示されていないため確証はないものの、樹脂により大きく補填のなされた本資料がこれに該当する可能性が高い。なお、図2では表面に補填がなされていない部分のみを鉄刀片として図示した。各破片が接点をもたないことは確かだが、あくまで肉眼観察によるものであり、正確な形状は不明である。

現存全長92.5cm、現存重量420g、刃部は現存長79.7cm、最大幅3.7cm、最大厚0.7cm、茎部は現存長12.8cm、最大幅2.8cm、最大厚0.7cmである。保存修復の際に大きく補填され、完形に復元されているが、切先や刃部の大部分、茎尻側に明らかに補填のみの部分があり、長さや重さについてはあくまで参考値である。関は刃部側が直角に切れ込む片関で、茎部に長さ3.0cm、幅3.0cmの鉄製釦が錆着している。肉眼観察による限り、遺存する範囲に目釘は確認できない。

(2) 馬具（図5、写真6）

鉄製円環轡片である。『天田郡中夜久野村沿革史』（1956）で「馬具 鏡止メ」として報告されているものがこれにあるとみられ、井上守による「明治37年中夜久野小学校々庭内長者古墳出土品 昭和三十二年七月二十五日調」に図示されているものと一致する（井上1957）。

厚さ0.9×1.2cmの鉄棒を鍛打してつくった直径7.6×8.2cmの円環部に、3連の兵庫鎖を取り付けて立間部としている。兵庫鎖は全長5.1cm、幅2.5～2.7cmで、厚さ0.8cm、長さ5cmほどの長楕円形の鉄棒を円環部側から折り曲

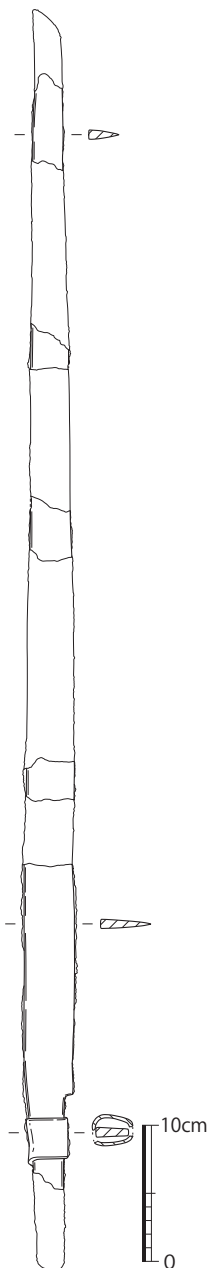


図4 長者森古墳出土鉄刀 (S=1/5)

げて固定しつつ、環部をつくりだしている。上端の兵庫鎖の内径からみて、もともと3連であったとみてよいだろう。円環には衝内環と引手内環がそれぞれ取り付けられているが、環部の大きさ（直径2.0～2.2cm）や鉄棒の厚さ（0.8×0.5cm）はほぼ同じであり、どちらが衝で、どちらが引手かはわからない。

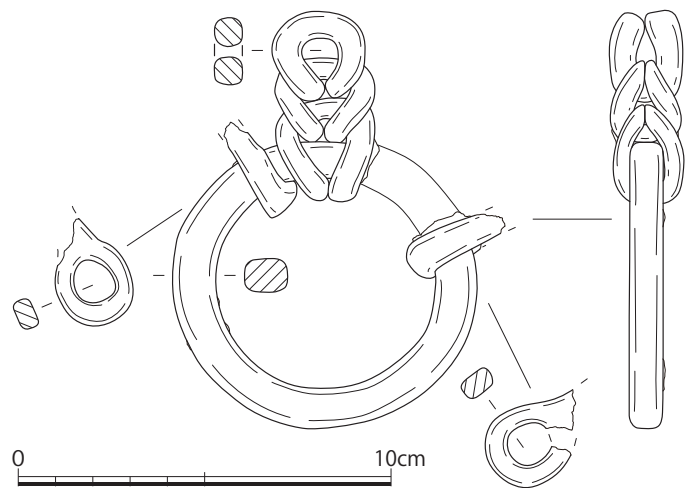


図5 長者森古墳出土馬具 (S=1/2)

諸氏の分類に照らし合わせると岡安光彦（1984）の環状鏡板付轡の素環系にあたり、円環が円形を呈する点や複連兵庫鎖、引手衝別連法などから氏の第Ⅰ～Ⅱ段階（MT15～MT85型式期）、花谷浩



図6 長者森古墳出土耳環 (S=1/2)

（1986）の兵庫鎖立聞素環鏡板付轡a類Ⅱ式にあたり、氏の第1群（TK47～TK10型式期）にそれぞれ該当する。研究者により名称が異なるが、筆者は朝鮮半島南部で5世紀後葉～末にまず出現し、初期の事例を中心に一定量の舶載品を含む可能性が高い、造付けの立聞部をもたないものを円環轡、そして円環轡をもとに6世紀初頃（MT15型式期）に日本列島で考案され、大量に流通したとみられる、造付けの立聞部をもつものを素環轡と呼んで両者を区別しており、本例は前者に該当する。7連の兵庫鎖を立聞部とする円環轡が陝川玉田M8号墳（大加耶Ⅳ段階：6世紀初～前葉）から出土しており、本例のような兵庫鎖を別造りの立聞部とする円環轡の系譜は、朝鮮半島南部の中でも加耶に求められる可能性が高いが（諫早2012）、本例は兵庫鎖が短いためあえて舶載品とみる必要はないだろう。

（3）耳環（図6、写真7）

1点の銅芯鍍金耳環が出土している。蓋に「管玉金環」のラベルが貼られ、身に「中夜久野小学校」の焼印が押された木箱に保管されている。『天田郡中夜久野村沿革史』（1956）に本墳の「発掘物」としてみえる「金環 直径約五分（1.5cm）上面のみ金」がこれにあるとみられるが、大きさが一致しない。井上守による「明治37年 中夜久野小学校々庭内長者古墳出土品 昭和三十三年七月二十五日調」に図示されているものと同一個体とみられる（井上1957）。

直径2.1×2.3cm、太さ0.7×0.5cmの断面楕円形で、重さは10.0gである。腐食により銅芯がほぼ露出しており、図のトーンで示した範囲に鍍金の痕跡が認められる。澤田秀実分類のC類にあたり、TK217型式期の須恵器とおおむね共伴するようである（澤田2022）。

5. 小結

長者森古墳（長者森2号墳）は、1904年の夜久野小学校建設の際に遺物が出土し、戦後になって簡略な報告がなされたものの、本調査開始時点では長者森古墳出土か太田森2号墳出土か判断が難しい遺物もあった。今回、半世紀以上ぶりに出土遺物の悉皆調査を実施し、過去の記録類との対応について精査した結果、須恵器11点（杯蓋4点、杯身7点）、鉄刀1点、馬具（鉄製円環轡）1点、耳環1点が、夜久野町化石・郷土資料館に保管されていることを確認し、資料化をおこなった。なお長者森古墳からはこのほかにも管玉1点出土しているが、今回は保管されていた木箱を確認したのみで、遺物自体の所在は確認できなかった。

また現地にも今もある墳丘や横穴式石室についても（株）相互技研に委託し、SfM-MVSによる三次元計測を実施した。今回得られた3次元データは横穴式石室研究のみならず、丹波最大級、夜久野最古の横穴式石室墳であり、墳丘や天井石も含めた石室内の空間が良好に保たれている長者森古墳を今後、保存活用していく上での基礎資料ともなるだろう。

古墳の築造時期（初葬時期）については従来、石室構造などからTK10～MT85型式期と考えられてきたが（富山2007）、MT85型式に位置づけられる古相の須恵器にくわえて、TK43型式やTK209型式以降に降る新相の須恵器が含まれていることが明らかとなった。ほかの出土品も兵庫鎖をもつ鉄製円環轡はMT85型式期を下限とするのに対し、断面楕円形の銅芯鍍金耳環についてはTK217型式とおおむね共伴すると考えられているものであり、後者は新相の須恵器とともに追葬に伴うものとみるのが妥当であろう。鉄刀に伴う釦は一般にTK43型式期以降の両関の鉄刀にみられる特徴とされるが（菊地2010）、本例のような片関の鉄刀に釦を伴う事例は静岡県鳥居松遺跡出土金銀装円頭大刀や岡山県穴が谷古墳出土銀装円頭大刀といったTK10型式期の朝鮮半島系装飾大刀に散見される。長者森古墳出土鉄刀についても製作地はさておき釦を伴う初期の鉄刀とみることが可能であり、初葬に伴うものとみて大過ないだろう⁽¹⁾。追葬の回数を議論する手がかりに欠けるが、出土遺物をみる限り、6世紀第3四半期（MT85型式期）に古墳が築造されたあと、複数回の追葬があった可能性が高い。

（諫早直人）

註

(1) 鉄刀の評価については齊藤大輔氏（鳥根県立八雲立つ風土記の丘）よりご教示いただいた。記して感謝したい。

参考文献

諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』 雄山閣

井上 守 1957 「夜久野地方の古墳」 『史の友』 第7集 夜久野史友会

岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」 『日本古代文化研究』 創刊号 PHALANX—古墳文化研究会—

菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会

澤田秀実 2022 「耳環の生産体制と副葬の意義～使用された金属原材料の検討から～」『人・墓・社会～日本考古学から東アジア考古学へ～』 雄山閣

深澤芳樹 2002 「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘報告書』（本文編）奈良文化財研究所

田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

富山直人 2007 「京都丹波の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会

中夜久野村（編）1956 『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』

花谷 浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会

菱田哲郎 2013 「考古資料からみた夜久野の古代」『夜久野町史』 第四巻（通史編） 福知山市



3



4



6



8



9



10

写真3 長者森古墳出土土器（1）（番号は図3に対応）



写真4 長者森古墳出土土器 (2)

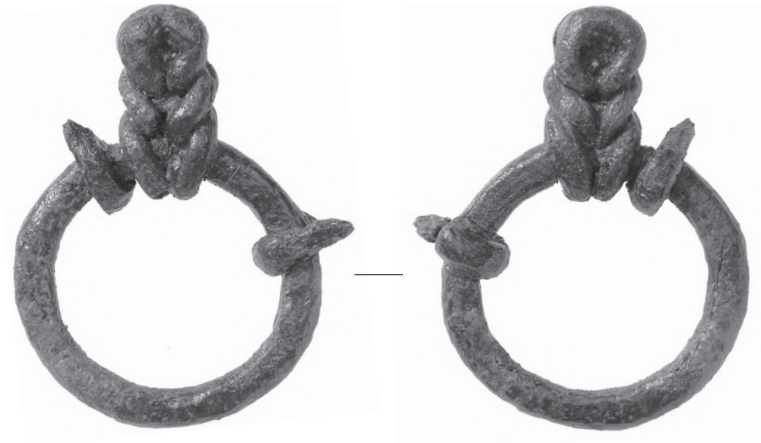


写真6 長者森古墳出土馬具 (S=1/2)



写真7 長者森古墳出土
耳環 (S=1/2)



写真5 長者森古墳出土
鉄刀 (S=1/ 5)

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)

発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月29日

印刷 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2